

## 編集後記

研究室の窓から見える街路樹が緑の樹形の中に少しだけの赤みを含んではいるが黄色が主体の色に変化して来ている。朝夕の冷え込みが少しずつ始まっている。美しい日本の四季は人間の歴史以前から続いて来た光景であると思うが、地球の46億年の歴史の中で、実は様々な気候の変化が地球の各地で繰り返行われて来た。

アフリカの砂漠化の原因の一つはアジア大陸とインド大陸の衝突により出来たヒマラヤ山脈の形成による気候の変化と考えられている。このような地球環境の変化の中で人類が誕生し、生命のビックバンが行われたようだ。

我々を取り巻く昨今に目をむけると、ご承知のように、20世紀後半より分子生物化学の発展は目覚ましいものが有り、医学研究においてビックバンを形成している。様々な生命の仕組みや疾患の病態解明、そして治療法の開発と急速に進展しつつある。若い頃に勉強しても解説が曖昧でなかなか理解出来なかった事が、分子生物学による解明が進んでようやく筋道を立てて理解することができた事も多い。

更に、外科治療に目を向けると、Billrothが胃切除術に成功したのが1881年であり、それより少し前に麻酔法の開発や接触感染予防、石炭酸散布法などの近代外科学のターニングポイントの原点が存在する。そして、19世紀後半から20世紀初頭は時代の寵児となった。思い返せば、20世紀半ば頃に生まれた我々団塊の世代で医学部卒業したものの多くが外科を目指した時であった。今日、腹腔鏡手術やロボテック手術などの新しい技術導入が行われ、外科学・外科治療の魅力はさらに深まり、素晴らしい進展の中にあると思われるが、外科学会の調査によると消化器・一般外科を希望する外科医の数は20年前に比べると約50%に落ち込んでいる。消化器外科についても若手医師の減少が、診療・研究・教育を続けて行う上で大きな問題となっている。この問題を考え、病態解明して根治治療に結びつけるにはどうすべきか。前会長の跡見教授（杏林大学）は会長講演において日本消化器外科の緊急課題として呈示された。消化器外科が存在する環境の変化を正しく捉え、評価して今後のプランを真剣に考えたい。

幸い、本誌の投稿論文数は増加の傾向に有り、編集委員会も大変忙しい。編集委員会終了後に夜遅く帰宅する新幹線の中で、これからの若い消化器外科医のために今何を成すべきか、と頭に浮かぶ課題が多い。

(佐々木 巖)